

総合的な学習の時間における『探究』する子どもの育成

～『探究』の姿を引き出すための教師のしかけ～

中山 和幸・福井 規之

学校提案に即し、発達の段階を視野に入れた『探究』の姿を設定し、その姿を引き出すためのしかけを構想した。本稿では、第5・6学年複式「海の資源を増やそう～ヒラメの飼育・放流～」と第5学年「わがまちの誇りと歌山城～和歌山城魅力発信プロジェクト～」の単元において、『探究』の姿を引き出すことができたのか、そのしかけが有効だったかを検証したことを述べる。第5・6学年複式の実践では、子どもの主体の姿を引き出すためには、子どもが「子どもが問題だと切実に感じる状況」や「行動せざるを得ない状況」を生み出す必要があるということが明らかになった。また、協働、活用、省察の姿を引き出すために地域の人材活用は有効な手段であるが、地域の人材活用法が極めて重要であることが明らかになった。第5学年の実践では、子どもの主体の姿を引き出すためには、子どもにとって学習材が身近なものであったり、学習をとおしてより身近なものになっていたりすることが必要であることが明らかになった。また、地域の外部人材の方との出会いやかかわりを意図的に設定して、子どものモチベーションを上げることも主体の姿を引き出すうえで効果的であることも明らかになった。また、学習材と繰り返しかかわる機会を設定することについても、子どもの主体、活用、協働の姿を引き出すために効果があったと考えているが、そのためには意図や目的を明確にした学習材とのかかわりや、かかわりをとおして得た知識や情報を子どもたちが共有する場面を効果的に設定することが必要であることも明らかになった。

キーワード：学習材、地域人材の活用、自己調整、個別最適な学び、協働的な学び

1. 研究内容・方法

総合的な学習の時間では、探究的な学習の過程を充実させることが重視されている。その過程の中で、各教科における見方・考え方を総合的に活用し、事象を多様な角度から俯瞰して捉え、実社会・実生活の課題を探究し、自己の生き方を問い続ける学びが展開されることをめざしている。

本研究では、総合的な学習の時間において本校で設定した発達の段階を視野に入れた子どもの『探究』の姿を引き出すため、子どもたちにとって身近な学習材を設定するとともに、それらにかかわる外部人材との出会いを単元に位置付けることで、子どもたちが主体的に問題解決に取り組んでいく『探究』の姿が見られるだろうと仮説を立て、そのめざす姿を具現化するための教師のしかけを行い、各実践ごとに検証を行う。なお、2～4項は第5・6学年複式で実践したこと、5～7項は第5学年で実践したことについて述べる。

2. 第5・6学年複式の授業の実際

2. 1. 対象・単元・期間

対象：5・6年F組児童8名

(5年生：2名、6年生：6名)

単元：海の資源を増やそう～ヒラメの飼育・放流～

期間：令和4年5月～令和4年8月

2. 2. 単元設定にかかわって

2. 2. 1. 5・6年F組、8名の子どもについて

本学級の子どもは、昨年度からCHANGEの学習でSDGsに関わる取り組みを行ってきており、SDGsに興味・関心をもち、取り組みを行った経験をもつ。5年生は、漂着ごみを活用した海ごみアートでの啓発活動を行い、6年生は、漂着ごみがなくなるよう、使い捨てストローの使用を控えたり、海の資源が増えるよう、アマモの栽培を行ったりするなど様々な取り組みを行ってきている。

しかしながら、それらの活動をとおして、一人一人の子どもの生き方がより確かになったり、変容したりしたかという点、その点に弱さがあると感じる。

2. 2. 2. 単元の目標

地域の「課題」について調査したり、その道のプロと協働しながら、課題の解決策について考え、実行したりする活動をとおして、地域の課題の原因、課題解決に向けた地域の人々の工夫や努力、課題の解消に向けて自分たちにもできることがあることを理解し、多様な視点から、課題の解決策について考えるとともに、

自らの生活や行動に生かすことができるようにする。

2. 2. 3. 単元でめざす探究する子どもの姿

本実践では、子どもの発達の段階を視野に入れ、以下のような探究する子どもの姿をめざす。

「主体」の姿として、課題の解決・解消に向けて、学習の目標や学習の仕方を調整しながら、切実感をもって、粘り強く学習に取り組む姿をめざす。

「協働」の姿として、地域人材との協働をとおして、適切に情報を収集したり、協力して、課題の解決策を考えたりして、課題解決に向けた取り組みを行う姿をめざす。

「活用」の姿として、地域人材との協働をとおして得た情報を活用し、課題の解決に取り組む姿をめざす。

「省察」の姿として、課題の解決をとおして学んだことを自己の生き方とのかかわりで意味づけたり、自覚したりする姿をめざす。

2. 2. 4. 教材の価値

本校所在地である和歌山市は、国が選定する「SDGs 未来都市」に選ばれており、行政は、「住み続けられるまちづくり (11 番)」や「海の豊かさを守ろう (14 番)」に力を入れて取り組んでいる。さらに、和歌山市内の企業や団体においても SDGs を意識した取り組みが進められていたり、市内の小学校においても SDGs にかかわる実践がいたるところで行われたりするようになっている。この点において、目的を共有する多様な他者との協働が生まれる可能性がある。地域に実在する SDGs にかかわる課題の解決を進める中で、年齢や住んでいる地域を問わず、多様な他者と協働し、多角的な視点から自分 (たち) にできることを考え、実行する姿を引き出したい。そのような過程の中で SDGs の視点を取り入れ共生可能、持続可能な自分らしい生き方を構想してほしいと願う。

また、本単元で飼育・放流にチャレンジする「ヒラメ」は、海水魚の中でも比較的生後 1 年目の成長が早い魚である。約 2 ヶ月という限られた飼育期間の中でも 3 cm 前後の成長が見られ、飼育していく中でヒラメが大きく成長することを捉えやすいため、飼育活動を行う中で、手応えや飼育の喜びを感じることができると予想する。

ヒラメは、普段は砂の中にもぐり、餌を食べる時のみ顔を出す習性があったり、暗室において緑色の LED ライトを当てることで成長が促進されるという報告があったりすることから、ヒラメが生きていくために、必要な環境や条件などがあることに気付き、海の資源を増やすためには、海を環境を魚にとってよりよいものにしていく必要があるといったことを理解するのに適した教材であると考えられる。

2. 3. 単元計画 (全 17 時間)

第 1 次 和歌山市にはどのような問題があるのか調べ、学習テーマを決めよう! (5 時間)

- ・磯観察を体験しよう (2)
- ・栽培漁業センターで栽培漁業の様子を見学しよう (2)
- ・学習テーマを決めよう (1)

第 2 次 和歌山市で起こっている問題の対策を考え実行しよう。(10 時間)

- ・ヒラメの飼育・放流を実行しよう。(10)

第 3 次 活動を振り返ろう。(2 時間)

自分たちの取り組みを振り返り 2 学期の活動を決めよう。

2. 4. 学習の流れ

2. 4. 1. 磯観察を体験しよう

環境学習アドバイザーの指導のもと、加太の海で磯観察を行った。たくさんの海の生き物を観察し、海を楽しんだ。

環境学習アドバイザーからは、こんな風に磯観察を愉しめる海の環境が日本全国の当たり前ではなくなっていることや和歌山の豊かな海の環境を今後も保っていく必要があることを聞いた。



図 1 磯観察を楽しむ子ども

2. 4. 2. 栽培漁業センター見学をしよう

栽培漁業センターへ見学に行き、栽培漁業の大切さや栽培漁業センターの方々の活動について学んだ。ヒラメの放流体験やアワビのエサやり体験なども行った。

和歌山の水産資源豊かな海を守るための活動に自分たちも協力したいという思いをもった。



図 2 栽培漁業センターの方の話聞く



図3 アワビのエサやり



図4 バケツに入れたヒラメの放流体験

2. 4. 3. 学習テーマを決めよう

磯観察、栽培漁業センターの見学を経て、1学期のCHANGEの学習テーマについて話し合った。

子どもたちの中には、磯観察の際に聞いた和歌山県環境学習アドバイザーの「磯観察が日本全国のどこでも当たり前に行えるわけではない。和歌山の豊かな海の環境を守っていかねばならない」という言葉や栽培漁業センターで行ったヒラメの放流をヒントに1学期の活動を「ヒラメの飼育・放流」に決めた。ヒラメの飼育・放流をすることに決めた子どもたちは、活動を成功させるために大切なことについて話し合った。その日の授業の最後に6年生のこうたは次のような振り返りを書いた。

こうたの振り返り

今日分かった事は、ヒラメを最後までちゃんと育てるとい事です。なぜなら、ヒラメにも命があるから、ちゃんと育てて放流したいなと思いました。けど、ちゃんと育てるには、まだまだ準備ができていないと思うから、まず責任をもってそこから色々な事を知って、かえればなと思います。そうかんたんにかえれないから、生き物の命という気持ちを持って飼いたいです。

2. 4. 4. ヒラメの飼育・放流を実行しよう

2. 4. 4. 1. 飼育の方法を調べよう

ヒラメの飼育・放流を行うことで和歌山の豊かな海の資源を守ろうと考えた子どもたちは、まず飼育の方法を調べ、水槽、濾過機、エアポンプ等の準備を行った。その後、ヒラメの飼育方法を栽培漁業センターの方にオンラインで尋ねた。ヒラメの放流サイズにかかわる規定は、10cm以上ということも教わり、目標が明

確になった。



図5 栽培漁業センターの方に飼育方法を尋ねる子ども

この日の授業でこうたは次のような振り返りを書いた。

こうたのメモ

魚が住みやすいように作る。

砂は、細かい綺麗な砂を入れたらいい。

水温の適度な温度は、20度ぐらい。

餌の量は、魚のサイズの2%位の量「8センチのヒラメ10匹だと6g

一日小さじ一杯分位を与える。

水温が上がると酸素の使う量が多くなる。酸素が減っていく。

魚に対してやっっては行けない事は、餌を与え過ぎない。

魚を早く成長させるためには、安全に飼う、水温を少し上げる。

ヒラメは、ストレスを感じる。ストレスを感じると、体調が悪くなる。

水槽を叩くとストレスを感じる。

ヒラメは、ストレスでは、死なない。けど病気にかかりやすい。

ヒラメはLEDライトの色で成長の速度が違う「緑色が一番いい」

砂の量は、1センチでいい。

10cm以上で放流できる

こうたの振り返り

今日は、栽培漁業センターの人に、お話を聞きました。それで分かった事がたくさんありました。それは、砂の事、水槽の事、ヒラメが感じる事などの話を聞きました。砂の事は、砂は普通の砂より、細かい綺麗な砂がいいという事です。

水槽の事は、水温の適度な温度は、20度という事や、水温が上がると酸素の消費量が多くなり、酸素が減っていくという事です。ヒラメは、ストレスを感じる事があり、死ぬ事はないかもしれないけど病気になってしまうと聞いたから、ストレスを与えないように、かっしていきたいなと思いました。

2. 4. 4. 2. ヒラメを10cm以上にしたいのに餌を食べない

1学期中にヒラメを10cm以上にし、海に放流するという明確な目標ができた子どもたちだったが、飼育スタート後すぐに大きな問題が起こった。約7cmの大きさと受け取ったヒラメが餌を食べないのだ。

ヒラメが餌を食べる方法について考えた結果、子どもたちは、次の2つのことを行うことにした。

①カーテンをつける

理由：人をこわがっているから

揺れに敏感だから

②水面を低くする（水位を10cmくらい下げる）

理由：ヒラメから餌が見えていない可能性があるから

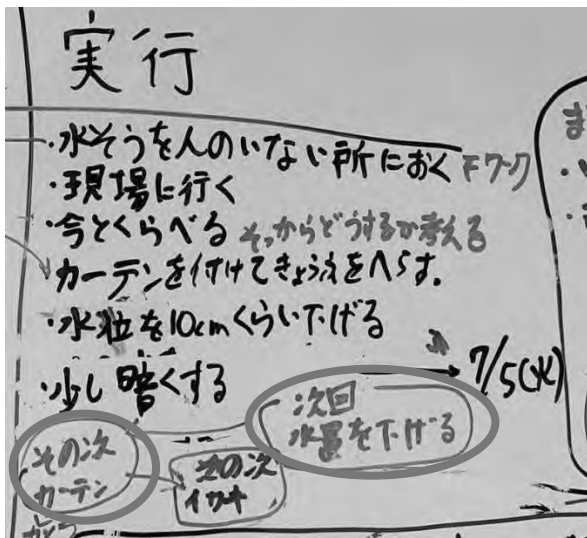


図6 板書：ヒラメの餌食いをよくするために実行すること



図7 水位を下げる前



図8 水位を下げた後

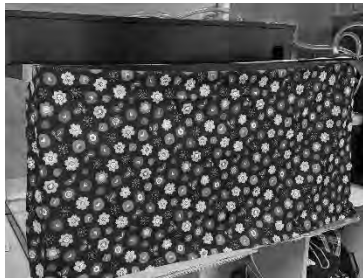


図9 水槽につけたカーテン

ヒラメの餌食いをよくするために考えた2つのことを実行した結果、餌を食べなかったヒラメたちが食べるようになり、餌を食べている様子をヒラメを驚かさないう、こっそり動画に撮り、喜ぶ姿があった。



図10 こっそりヒラメの様子を撮影する子ども



図11 餌を食べに上がっていくヒラメ

2. 4. 4. 3. 身体測定をして10cm以上になっているか確かめよう

放流予定日の約2週間前にヒラメの身体測定を行った。ヒラメを直接手で触るとヒラメにとって、人間の体温はとても熱く、ストレスになってしまうことから、ヒラメに直接接触らないように気をつけながら、一匹一匹の大きさを測定した。体長は、ものさしで測り、体重は、電子ばかりで測った(図13)。

測定結果を、ホワイトボードにまとめていくと、ほとんどのヒラメが9cmを越え、順調に成長していた。



図12 電子ばかりで体重を測定する子ども

	体長	体重	体調
1	10cm	11g	◎
2	11.5	10	◎
3	12	12	◎
4	11	9	◎
5	9	6	◎
6	9	7	△
7	9	7	◎
8	7	7	◎
9	11.5	13	◎
10	12	12	◎
11	11.5	約10	◎
12	10	13	◎
13	9.5	4	◎
14	9	6	◎
15	12	12	◎

図13 身体測定の結果(一部)

身体測定を終え、バケツにいったん隔離していたヒラメを水槽に戻す時に問題が起こった。水槽に戻した5匹のヒラメが死んでしまっていたのである。大きく口とエラを広げ、死んでいた。



図14 死んでしまったヒラメ

2. 4. 4. 4. ヒラメは、なぜ死んでしまったのか

5匹のヒラメが死んでいることに気が付いた子どもたちは、すぐに原因を考えた。この時、全員が「水槽に戻した時の水圧で死んでしまった」と考えた。すぐに栽培漁業センターに電話し、その時の状況を伝え、意見をもらった。すると子どもたちにとっては意外な答えが返って来た。栽培漁業センターの方の見解は「酸欠」であった。

ヒラメが口やエラを広げて死んでいることから、「おそらく酸欠である」という結論であった。そこで、身体測定中の状況をもう一度振り返ると、身体測定中の約30分間、エアポンプを入れ忘れていたバケツがあり、そのことが原因であると全員が納得した。

この日の授業後にこうたは、次のような振り返りを書いた。

こうたの振り返り

今日は、ヒラメの身体測定をしました。その時に、自分の役割を見つけ、それを協力してできたから、よかったです。

けど、ひとつ残念なことがありました。それは、ヒラメが亡くなったことです。自分達が、もう少し、水槽に早く入れてあげたら、亡くならずに、生きていたのに、自分達のせいで亡くなってしまったから、そこは、反省したい所です。これをただの反省とするのではなくて、この事も、活かして、これからも、育てていきたいです。それで昨日分かった事は、考えて行動ができなかったという事です。今度は、この事を守るという気持ちで、育てたいです。

2. 4. 4. 5. ヒラメを放流しよう

ヒラメの放流予定日は、あいにくの荒天（雷注意報発令）で、海岸での放流は、延期となった。そして、放流は、夏休み中に担任と栽培漁業センターの方で行い、その様子を子どもたちは家庭からオンラインで視聴するというかたちをとった。

放流後、こうたに感想を尋ねると、次のように答え

た。

こうたの感想

2ヶ月間ヒラメを育ててきて、5匹死んでしまったけど、最後はちゃんと放流することができて、（栽培漁業センターの方が）することを丁寧に教えてくれて（飼育・放流することが）できたので、よかったです。

2. 4. 4. 6. 活動を振り返ろう

2学期に入り、学習のまとめとして、1学期の活動を約2分間の動画にまとめ、振り返りを行った。その時、こうたは次のように振り返りを書いた。

こうたの振り返り

1学期 CHANGE は、自分的には、失敗っていうか、成功したとは、いいきれないんじゃないのかなと思います。

かいはじめの頃は、1匹の命のおもさなどがわかっていなくて、へいきで（休み時間に）遊びに行ったりして、全く餌やりなどをしていませんでした。

結局は、飼いたいだけの気持ちで飼っていたんだと自分の気持ちがわかりました。それは、ひどいなと思いました。思うだけだったからダメだったんだろうと思いました。

だから、思うだけじゃなくて、ちゃんと行動に移して、放流できたらなと思います。

1学期は、色々な方がゲストティーチャーとして来てくれたり、電話などで話を聞きました。それで特に役にたったというか聞いてよかったと思ったことは、栽培漁業センターの方から聞いた魚の事です。なぜ聞いて良かったと思ったかというところ、聞いたその頃に、自分たちは、飼育の方法に困っていたり、魚を殺してしまったからです。その時、原因など、さまざまな事を聞いて、それからは、殺してしまったけど、最低限に減らせたから聞いて良かったと思いました。

けど、自分たちの目標は、ヒラメ全て放流を目指していたからそれは、達成できなかったから、次は全て放流できるようにしたいです。

そのためには、分からないこととかも出てくると思うから、そういうのは、専門の人などに聞いて、2学期は、全て放流したいです。

3. 第5・6学年複式の授業の考察

3. 1. 学習材について

本単元の学習材は、「ヒラメ」であった、子どもにとって身近ではないけれども、学習材と繰り返し関わる中で、次第に身近になってくる。そして、ヒラメの飼育を行う中で起こりうる「子どもの思い通りにならない状況（例えば、病気が流行る、餌を食べない、ヒラ

メが死んでしまうなど)が子どもの主体の姿を引き出す」というイメージで学習材を選定した。こうした学びに着目しながら、学習材は「子どもの発達段階に合っており、めざす主体の姿を引き出すために適当であったのか」について考えてみる。

3. 1. 1. 主体の姿について

本単元でめざした主体の姿は次のようなものであった。

「主体」の姿

課題の解決・解消に向けて、学習の目標や学習の仕方を調整しながら、切実感をもって、粘り強く学習に取り組む姿をめざす。

こうたは、ヒラメの飼育がスタートする前から、「ヒラメにも命があるから、ちゃんと育てて放流したい」「生き物の命という気持ちを持って飼いたい」と振り返りに書いており、「命の大切さ」を強く意識している子どもである。指導者は、こうした「命を大切に思う気持ち」が主体の姿を引き出す原動力となるのではないかと予想していた。

こうたが学習材であるヒラメとかかわりながら、主体的に学習を進めることができたのかについて、こうした振り返りから考察してみる。

【こうたの振り返り】

①ヒラメの飼育開始前

- ・ヒラメにも命があるから、ちゃんと育てて放流したいな。
- ・生き物の命という気持ちを持って飼いたい。

②ヒラメの飼育開始時

- ・ヒラメは、ストレスを感じる事があり、死ぬ事はないかもしれないけど病気になってしまうと聞いたから、ストレスを与えないように、かっていきたいな。

③ヒラメを死なせてしまった時

- ・残念なことがありました。それは、ヒラメが亡くなったことです。自分達が、もう少し、水槽に早く入れてあげたら、亡くならずに、生きていたのに、自分達のせいで亡くなってしまったから、そこは、反省したい所です。これをただの反省とするのではなくて、この事も、活かして、これからも、育てていきたいです。

④放流後

- ・かいはじめの頃は、1匹の命のおもさなどがわかっていなかった
- ・へいきで(休み時間に)遊びに行ったりして、全く餌やりなどをしていませんでした。

こうたは、単元をとおして、「命の大切さ」について考え、学習の目標や仕方を調整している様子が見える。したがって、引き出したい主体の姿に照らしあわせて考察した時に「学習の目標や仕方の調整」といった面では、学習材として適当であったと考える。

しかし、放流後には、「へいきで(休み時間に)遊びに行ったりして、全く餌やりなどをしていませんでした」と振り返っていることから、自己評価として、「切実感をもって」「粘り強く学習に取り組む」といったことができていなかったと考えている様子が窺える。この点から考えるとヒラメという学習材は適当とは言えないかもしれない。

では、休み時間にも切実感をもって、餌やりを欠かさないほどの主体の姿を引き出すにはどのような学習材が適当であるのだろうか。

「責任をもって飼いたい」という思いをもって、スタートしたこうただが、責任をもって餌やりが出来なかった理由は一体何だろうか。

それは、単元の中でヒラメの命が脅かされるような状況に弱さがあったためではないかと考察する。餌を食べない状況はあったが、ヒラメが弱って、死んでしまいそうな状況ではなかったため、こうした切実感を引き出す状況に至らなかったのではないかと考える。

主体の姿を引き出すためには、「子どもが問題だと切実に感じる状況」や「行動せざるを得ない状況」を生み出す必要があると考える。

3. 2. 地域人材について

本単元において活用する地域人材は、「栽培漁業センターの方」であった。地域人材との関わりを通じて、子どもは地域人材と協力したり、地域人材から聞いたことを生かして活動したり、地域人材からの問いかけや評価によって活動の意義を見出したり、自己の頑張りを振り返ったりすることができると考えた。即ち、地域人材の活用によって、子どもの協働、活用、省察の姿が豊かになるのではないかと考えた。

ここでは、こうした学びに着目しながら、地域人材の活用は「子どもの発達段階に合っており、めざす協働、活用、省察の姿を引き出すために適当であったのか」について考察してみる。

3. 2. 1. 協働の姿について

本単元でめざした協働の姿は次のようなものであった。

「協働」の姿

地域人材との協働をとおして、適切に情報を収集したり、協力して、課題の解決策を考えたりして、課題解決に向けた取り組みを行う姿をめざす。

こうたが学習材であるヒラメとかかわりながら、地域人材と協働的に学習を進めることができたのかについて、こうした振り返りを主な手がかりとしながら考察してみる。

【こうたの振り返り】

単元終了時

特に役にたったというか聞いてよかったと思ったことは、栽培漁業センターの方から聞いた魚の事です。なぜ聞いて良かったと思ったかという、聞いたその頃に、自分たちは、飼育の方法に困っていたり、魚を殺してしまったからです。その時、原因など、さまざまな事を聞いて、それからは、殺してしまったけど、最低限に減らせたから聞いて良かったと思いました。

けど、自分たちの目標は、ヒラメ全て放流を目指していたからそれは、達成できなかったから、次は全て放流できるようにしたいです。

そのためには、分からないこととかも出てくると思うから、そういうのは、専門の人などに聞いて、2学期は、全て放流したいです。

地域人材である「栽培漁業センターの方」に様々な情報を聞くといったかたちでの「協働」をこうたが行い、協力しながら、課題の解決策を考え、課題解決に向けた取り組みを行うことができている様子が見える。

また、「分からないことが出てくれば、専門家に聞きたい」という内容の記述から、こうたが、地域人材と協力することのよさを感じ、今後も活動の中で自ら協働しようとしている様子が見える。

このようなこうたの姿を引き出すことができたのは、「飼育開始時」「ヒラメが餌を食べない時」「ヒラメが死んでしまった時」など、こうたが必要感をもって地域人材と協働していたことに起因していると考えられる。必要感のある時に協力し、自分に必要な情報を入手することができた経験から、こうたの協働の姿がより豊かにあられるようになったのではないかと考える。

したがって、本単元における地域人材の活用は、めざした子どもの協働の姿を引き出すために適当であったと考察する。

3. 2. 2. 活用の姿について

本単元でめざした活用の姿は次のようなものであった。

「活用」の姿

地域人材との協働をとおして得た情報を活用し、課題の解決に取り組む姿をめざす。

こうたが地域人材との協働をとおして得た情報を活用し、課題の解決に取り組むことができたのかについて、こうたの振り返りを主な手がかりとしながら考察してみる。

【こうたの振り返り】

飼育開始時

栽培漁業センターの人に、お話を聞きました。それで分かった事がたくさんありました。それは、砂の事、水槽の事、ヒラメが感じる事などの話を聞きま

した。—中略—

ヒラメは、ストレスを感じる事があり、死ぬ事はなにかもしれないけど病気になるかもしれないから、ストレスを与えないように、かっていきたいなと思いました。

この振り返りから、地域人材である栽培漁業センターの方から聞いた情報を活用し、課題解決に取り組むこうたの様子がうかがえる。

また、次のようなメモを取り、飼育に必要となるであろうたくさんの情報を記録していることから、飼育開始時に栽培漁業センターの方から聞いた情報を活用しようとするこうたの姿勢がうかがえる。

こうたのメモ

魚が住みやすいように作る。

砂は、細かい綺麗な砂を入れたらいい。

水温の適度な温度は、20度ぐらい。

餌の量は、魚のサイズの2%位の量「8センチのヒラメ10匹だと6g

一日小さじ一杯分位を与える。

水温が上がると酸素の使う量が多くなる。酸素が減っていく。

魚に対してやっっては行けない事は、餌を与え過ぎない。

魚を早く成長させるためには、安全に飼う、水温を少し上げる。

ヒラメは、ストレスを感じる。ストレスを感じると、体調が悪くなる。

水槽を叩くとストレスを感じる。

ヒラメは、ストレスでは、死なない。けど病気にかかりやすい。

ヒラメはLEDライトの色で成長の速度が違う「緑色が一番いい」

砂の量は、1センチでいい。

10cm以上で放流できる

したがって、本単元における地域人材の活用は、めざした子どもの活用の姿を引き出すために適当であったと考察する。

3. 2. 3. 省察の姿について

本単元でめざした省察の姿は次のようなものであった。

「省察」の姿

課題の解決をとおして学んだことを自己の生き方とのかかわりで意味づけたり、自覚したりする姿をめざす。

地域人材の活用はめざす省察の姿を引き出すことができたのかについて、こうたの振り返りを主な手がかりとしながら考察してみる。

【こうたの振り返り】

単元終了時

1学期 CHANGE は、自分的には、失敗っていうか、成功したとは、いいきれないんじゃないのかなと思います。

かいはじめの頃は、1匹の命のおもさなどがわかっていなくて、へいきで（休み時間に）遊びに行ったりして、全く餌やりなどをしていませんでした。
—中略—

結局は、飼いたいだけの気持ちで飼っていたんだと自分の気持ちがわかりました。それは、ひどいなと思いました。思うだけだったからダメだったんだろうと思いました。

だから、思うだけじゃなくて、ちゃんと行動に移して、放流できたらなと思います。

こうたは、飼育開始前から「命を大切に飼いたい」という想いを強くもっている様子がかがえたが、単元終了時には、「自分の活動は失敗だった」と振り返っている。1匹の命の重さはわかっていたつもりだけれど、実際の自分の行動を振り返ると、飼いたいだけの気持ちで飼っており、命を大切にすることができていない、ひどい状態であったと考えている様子がかがえる。

さらに、思うだけではダメで、ちゃんと行動に移すことが大切であるということにも言及しており、こうたが自分の生き方とのかかわりで自身の学びの意味付けを行ったり、自覚したりしている様子がかがえる。

本単元においては、地域人材の活用とおして、このような姿を引き出そうと試みたが、このような、こうたの省察の姿は、地域人材との関わり以上に「飼育を怠ると死んでしまう」といった学習材のもつ力によるものであったのではないかと考察する。

したがって、学習材の吟味・工夫によってめざす省察の姿を引き出すことができると考察する。

また、地域人材とのかかわりの中で、自身の生き方とのかかわりで省察するような姿を引き出すことはできないのかという視点で考えると、その点は可能であると考ええる。

地域人材の方の工夫や努力を知ることによって、自分たちの飼育の方法との比較から、自身の飼育の仕方を見直すことは可能であると考ええる。

さらに、ヒラメが死んでしまったタイミングで、地域人材である栽培漁業センターの方から「ヒラメを死なさないようにするには、あなたたちの飼育の仕方を変えないといけないことはないかな？」などと問いかけていただくことでもそのことは可能になると考える。

したがって、めざした子どもの省察の姿を引き出すためには、人材活用をすることはもちろんだが、その活用が決定的に重要であると考ええる。

本単元で考えれば、前述したとおり、栽培漁業センターの方の仕事ぶりを観察する学習過程を単元に組み込んだり、栽培漁業センターの方からの問いかけでよ

り深く考えたりするような場面をつくり出す必要があったと考える。

4. 第5・6学年複式の成果と課題

子どもの主体の姿を引き出すためには、子どもが「子どもが問題だと切実に感じる状況」や「行動せざるを得ない状況」を生み出す必要があるということが明らかになった。したがって、学習材の選定の際には、そういった問題や状況が起こり得る、起こり易いものを選定する必要があることが明らかになった。

また、協働、活用、省察の姿を引き出すために地域の人材活用は有効な手段であるが、地域の人材活用が極めて重要であることが明らかになった。

したがって、子どもの発達の段階、興味関心等、子どもの実態を視野に入れ、地域人材との綿密な打ち合わせのもと意図的・計画的に地域の人材を活用していかなければならない。

そういったことから考えると、地域の人材活用は、子どもの必要感のある場面で繰り返しかかわっていただけのような「学びの伴走者」としての活用が求められると考える。

5. 第5学年の授業の実際

5. 1. 対象・単元・期間

対象：5年C組児童29名

単元：わがまちの誇り 和歌山城～和歌山城魅力発信プロジェクト～

期間：令和4年9月～令和4年12月

5. 2. 単元の目標

和歌山城について調査したことをもとに、多様な他者と協働しながら課題の解決に向けた活動をとおして、和歌山城の魅力を再認識したり和歌山城に関わる人の思いや願いを理解したりするとともに、多様な視点からそれぞれが考えた方法によって和歌山城の魅力を発信することができる。

5. 3. 単元でめざす探究する子どもの姿

本実践では、子どもの発達の段階を視野に入れ、以下のような探究する子どもの姿をめざした。

「主体」：自ら目標を設定し、粘り強く活動する。

「協働」：自分とは違う視点をもつ子どもとのかかわり自らの学びに生かそうとしたり、学習対象にかかわる人との出会いをとおして、自分の視点だけでなく多角的な視点から、課題について考えようとしたりする。

「活用」：多様な他者との協働をとおして得られた情報、ICT 機器等を活用して得られた情報、これまでの教科等の学習をとおして得られた知識及び技能などを活用し、課題の解決に取

り組む。

「省察」：課題の解決に向けて、見通しを立てて活動したり、学習の仕方を調整したりしながら、多角的に物事を考え、納得解を吟味したりし、そのような活動をとおして学んだことを意味付けたり、自覚したりする。

5. 4. 教材の価値

「和歌山城」には、多くの大名が関わってきた歴史を学ぶ価値がある。また、市街地であって多くの緑に囲まれ、植物や生き物についても学ぶことができる空間でもある。そして、日本でも3か所しかないお城の動物園も動物の生態などを学ぶ価値のある場所である。さらに、和歌山城に関わる人から学ぶ価値もある。おもてなし忍者として体が不自由な人への登城サポートを行っている方々や清掃活動を行っている方々から、和歌山城を訪れる人をおもてなしする思いや和歌山城を愛する熱意、ふるさと和歌山の環境を守り大切にしたい思いなど、子どもたちのこれからの生き方についての示唆も得られると考えている。

5. 2. 単元計画 (全 35 時間)

第1次 2学期の活動のゴールを設定し、活動の見とおしをもとう (3時間)

第2次 和歌山城の魅力を発信する方法や内容を考え、実行しよう (29時間)

- ・和歌山城の魅力を発信する情報を集めるため、調べ活動や和歌山城見学をとおして、和歌山城の歴史や自然、文化について理解を深めよう。
- ・興味・関心のある発信方法や内容ごとにグループを形成し、和歌山城の魅力を発信するために効果的な方法を検討しよう。
- ・和歌山市・和歌山城整備企画課の柳さんや「城プロジェクト」代表の川島さん、クリーンアンドコネクト和歌山の幸前さんなどに、自分たちが考える魅力発信案を提案しよう。
- ・考えた発信方法を実行しよう。

第3次 2学期の活動を振り返ろう (3時間)

5. 3. 本実践の概要

1学期、子どもたちは和歌山城についての調べ学習や現地調査をとおして、これまで気づいていなかった和歌山城の歴史や魅力を知ることができた。また、行政の方や和歌山城を訪れる人をサポートする方々との出会いをとおして、子どもたちと同じように和歌山城の魅力をより多くの人に伝えたい思いをもっていることにも気づかされた。そして、その方たちから和歌山城の魅力を発信するために力を貸してほしいと提案されたことを受けて、子どもたちがどんなことを大切にプロジェクトを進めていくべきかを考えてきた。

2学期、自分たちが見つけた和歌山城の魅力を発信するため、「和歌山城のことを多くの人に知ってもらおう」「楽しかった」と言ってもらえるお城にする」という活動目標を子どもたちで設定した。子どもたちはその目標達成に向けて、発信方法別に活動を進めた。自分たちが掲げたゴールに迫れるよう、グループで考えた案をクラス全体や子どもたちが出会った方々からアドバイスや意見をもらいながら、発信したい和歌山城の魅力がどのようにすればより効果的に受け手に伝えられるか、仲間と協働しながら考えてきた。

5. 4. 授業づくりにおける教師のしかけ

子どもたちにとって身近な学習材を設定するとともに、それらにかかわる外部人材との出会いを単元に位置付けることで、主体的に問題解決に取り組んでいく姿が見られるだろうと仮説を立て、3つのしかけを考え、子どもたちの学びをコーディネートした。

- 子どもたちの探究を充実させる人との出会い・かかわりをとおして、「主体」の姿を引き出す。
- 学習対象とかかわる機会を複数回設定することにより、「主体」「活用」の姿を引き出す。
- 発信方法別活動の設定と、協働場面の設定をとおして、「主体」「協働」「省察」の姿を引き出す。

5. 4. 1. 子どもたちの探究を充実させる人との出会い・かかわり

1学期の学習から、城プロジェクトの川島さんや和歌山市・和歌山城整備企画課の柳さんなど、和歌山城にかかわるうえでキーとなる人と子どもたちを会わせ、思いを聞かせていただく中で、和歌山城に対する思いや魅力を発信したいという意欲を高めてきた。子どもたちが出会い、かかわっていただいている人たちは、誰よりも和歌山や和歌山城のことが好きで、とても熱い思いをもった方たちだと子どもたちも感じている。子どもたちに和歌山城に関する知識を情報として与えてくれる存在としてだけではなく、一人の人間として、和歌山城を大切に、和歌山を盛り上げていくことに熱意をもって取り組むという、人としての生き方に惹かれる存在として、子どもたちが取り組む活動へのモチベーションアップにもつながるのではないかと考え、出会いを設定した。



図15 柳さん、川島さんと出会い、お話をうかがう

5. 4. 1. 1. 柳さん、川島さんとの出会いとお二人からの提案

子どもたちは柳さんや川島さんの出会いをとおして、お二人が自分たちと同じように和歌山城の魅力をより多くの人に伝えたい思いをもっていることにも気づかされた。そして、今後、和歌山城の魅力を発信するために力を貸してほしいと提案されたことが、以下のように今後の活動への意欲をもつきっかけとなった。

〈お二人からの提案後の振り返り〉

ゆうすけ

忍者についてまたいろいろなことが分かった。やはり忍者さんも和歌山城、また観光客への熱い気持ちがあるんだと思った。まさか、忍者が僕たちと同じ年だったとはびっくりした。最後に柳さんが「ぜひ！手伝ってください！」と言ってくれたので、ぜひ期待に応えたいと思う。

りこ

私たちも川島さんと同じように5Cになるまでお城のことについて関わりを持つまで全然知らなかったの、それを柳さんが言うてくれたように、和歌山城を広める、来てもらうきっかけを作ることが出来るように、授業の中でアイデアを出していきたいと思った。

〈川島さんのアドバイスを受けた後の子どもの反応〉

ゆうすけ

他の人たちが紹介しているような所ではなく、自分が「すごい、綺麗」と思ったような所を紹介して、同じような気持ちになってもらうのが大切なんだと思った。

りこ

これまで私は元々誰かが見つけて知ってそうなスポットしか紹介していなかったので難しそうだなと思っていた。探してみても、難しくてなかなか見つけられなかった。しかし、見つけられると自分だけが知っている場所のように思えてとてもうれしかった。この場所はあまり有名ではないと思うので、自分のおすすめスポットとして紹介していきたいと思った。

けいすけ

自分で和歌山城の撮影スポットをいくつも見つけられたので良かった。川島さんは「大人の真似はしなくていい」と言っていた。子供らしく子供しかできないようなことをしたいと思った。

5. 4. 1. 2. 川島さんからのアドバイス

2学期に入り、子どもたちは発信方法別にパンフレットやチラシ、ポスター、動画などの制作活動を始めていたが、既存のパンフレットやウェブサイトの内容をお手本にそれを真似るような内容を考えがちになっていた。そこで、本時の授業の前に、それぞれが発信しようとしている内容について、川島さんからアドバイスを受ける機会をしかけた。川島さんからは、「大人の真似はしなくていい。」「どこにも載っていないことを自分の目で確かめて伝えてくれたらいい。」との言葉をいただいた。



図16 川島さんからアドバイスを受ける子どもたち



図17・18 自分たちの目線でおすすめスポットを探索する子ども

5. 4. 2. 学習対象とかかわる機会を複数回設定

学習対象である和歌山城と直接かかわる体験活動を複数回設定した。1学期から子どもたちは、ミニ遠足と4度の見学を合わせて計5回、和歌山城を訪れた。それ以外に個人的に和歌山城へ行った子どももいた。

繰り返し学習対象とかかわるが、毎回目的やめあて、見る視点を明確に定めて見学することにより、新たな知識を得たり、さらに考えを深めたりすることができると考える。また、何度も見学することとおして、子どもたち一人一人が自分なりの和歌山城の魅力を発

見することにもつながると考え、かかわる機会を設定した。



図19 柳さんの案内を聞きながら和歌山城を調査する子ども



図20 和歌山城を訪れる人にインタビューをして調査する子ども



図21 和歌山城動物園の動物をじっくり観察して特徴をつかもうとする子ども

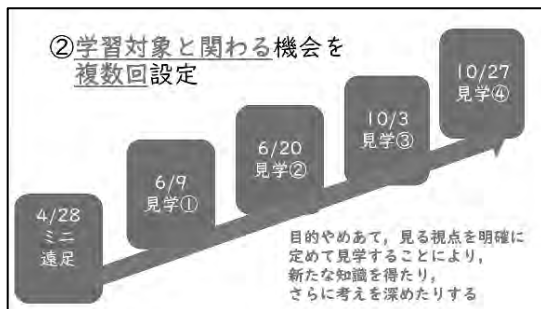


図22 学習対象（和歌山城）とのかかわり

本時では、和歌山城の建物よりも自然が主役と主張したみくの考えに関連して、同じく自然の良さを魅力に考えているひろきが発言する場面があった。

みく 和歌山城って建物が有名だけど、モミジや桜がきれいだし、建物が主役じゃなくて、自然が主役みたいなのが魅力だから、おすすめスポットにしました。

ひろき 6月とか7月とかそういう季節に、写真は撮れていないけど、アジサイがいっぱい咲きほこってすごく綺麗な所で、中央の橋の所まで行って橋を渡るとすごく綺麗なアジサイが見えて、そこが僕のおすすめです。

T 1学期にみんな見た？覚えてる？

C めっちゃ綺麗やった。

C 結婚式の写真とか撮ってた

C あー、撮ってたなあ。

C やってた、やってた。

T 誰かひょっとしたら1学期の写真撮ってるかもしれないよ。

C 私撮った！

C 鶴の溪やろ。

みくの自然へのこだわり。それに関連して出されたひろきのアジサイなどの自然への熱の高まりによる発言から、他の児童からもアジサイがきれいだった、アジサイをバックに結婚式の写真を撮っている人たちがいた、個人的にお城に行ってみたなど、これまでに複数回和歌山城にかかわって見てきたことが今回の授業の発言とつながった瞬間であったと考えている。

本時の授業後には、ひろきが県のレッドデータブックでは絶滅危惧Ⅱ種（環境省では準絶滅危惧）に指定されているツメレンゲを、作成しているパンフレットに掲載したいと言って自ら和歌山城へ探しに行き、石垣の間に生えているツメレンゲを見つけ写真を撮影してきた。ひろきにとって授業で行われた発言のやりとりがきっかけで、自然を大切にしたい考えに自信をもち、さらに学校外へ足を向かせる原動力になったと考えている。

5. 4. 3. 発信方法別活動の設定と、協働場面の設定

和歌山城の魅力を発信するために、子どもたち一人一人が自分の思う発信方法を思い描き、同じ方法を考えた者同士がグループを構成し活動している。自分で選んだり決めたりした方法での発信に向けて取り組むことで、主体的に責任をもってやりとげることができるのではないかと、また、子どもたちが自分の興味関心や得意なことを活かし、個別最適な学びを実現することにもつながるのではないかと考えている。

〈ゆうすけの振り返りより〉

9/5 まずはチームを組んで、他のPR動画を見たり、紅葉溪庭園の紅葉を使ったイベントについて少し考えた。

9/8 Tさん（和歌山城でイベントを開催する若山青年会議所の方）に電話で聞いた。聞いてみると、あのイベントも僕らと同じように活性化

などのためにするということが分かった。次からはイベント内容について考えていこうと思う。

9/29 具体的なイベントの内容を考えた。年代によって内容を変える（ちびっこは忍者体験、小学生はクイズ、というように）案が出た。次は和歌山城に行ってイベントに使う写真を撮ろうと思う。

10/11 今日は具体的なイベントの内容を考える続きを考えました。クイズラリーについて話し合い、少しずつ決まってきました。最後にはみんなに提案もして、ヒントを得ることもできました。

10/22 今日はクイズの具体的な内容を考えて、サンプルを作って送り合ったり、使う写真を集めたりしました。来週ぐらいに完成させたいです。

毎時間、グループでの活動の終わりの振り返り時間に、その日の進捗状況と次の時間の見通しをもつようにした。イベントを企画して開催することでお城の魅力を発信しようと考えているグループに所属したゆうすけの振り返りから、情報収集から活動を始め、実際に和歌山城でイベントを開催する予定の地域の青年会議所の方に聞き取りを行ったり、同じグループのメンバーと議論したりしながらイベント内容を考えていった。



図 23 発信方法別グループでの課題検討の様子

個別のグループでの活動と同時に、協働的な学びもCHANGEの学習を進めていくうえで大切であると考えている。個別の学びでは解決できない、多くの人の意見を聞くことで自分たちの考えたことをよりよいものにしたい、グループ別の活動を進める中でそのような課題が生まれてきた時には、クラス全体に課題を提案し、考え話し合う機会を設定する。また、必要に応じて子どもたちが出会った人々の力も借りる機会も設定する。多様な他者と協働してよりよいものを創り出すことで、多角的な視点から物事を見たり考えたりし、子どもたちの『探究』もより深まるものと考えている。

本時の授業では、各自が見つけたおすすめを紹介し合いながら、それぞれが発信する内容のブラッシュアップにつなげようとした。多様な視点でその内容を考えることをねらっていたが、子どもたちにその視点をうまく認識させることができなかった。自然、歴史、文化、大事にされている（持続）といった発言が子どもからあった。その時に、「みんなは自然と建物、どちらを大切に魅力伝えていきたいの？」などと教師から子どもたちに問い返し、深く考えさせたり、板書で強調したりすることで、それぞれの視点を意識させて考えさせることができたのではないかと振り返る。

〈本時の学習を終えての振り返り〉

ゆうすけ

話し合いをもとにして考えていると、紅葉溪庭園などの絶景ポイントが多かったので、みんなが感じたことと同じような気持ちになってもらえるように、クイズラリーのスポットをそのようなスポットにしていきたい。

りこ

どのように自分達が見つけてきたおすすめスポットをどのように活かせるか案を出し合うことができた。自分が思いつかなかったような活用の仕方を同じグループの友達からたくさん聞くことができて、今後の活動をさらに良いものにできそうで意義のある話し合いができた。

すみ

今日の授業は、みんなのおすすめスポットを語り合っって動画を作る時にとっても役立ちそう。次の見通しは、一人一人のおすすめの写真を組み合わせることでショート動画を作ることになった。私は紅葉溪庭園の写真をメインに動画を作っていきたい。

ひろき

今週の授業でいろいろなところを探せた。パンフレット作成では、いつも紹介されていないところを積極的に紹介したい。どこでどんな撮り方、文章の書き方で印象がかなり変わってくるので注意したい。普段紹介されないところも紹介したいけどよく紹介される場所も1つは取り入れたほうがいいかなと思った。

本時の話し合いをとおして、自分が考えていなかった和歌山城のおすすめスポットを他の子が見つけていたり、多くの子どもがおすすめに挙げていた場所を確認することができたりしていた。また、話し合いの中で他の子どもから出てきたおすすめスポットを参考に、各グループで制作している魅力発信の内容にも取り入れようと前向きにとらえている振り返りもあった。

6. 第5学年の授業の考察

本実践で考えた3つのしかけについて、単元でめざす子どもの探究の姿が引き出せたかどうか考察する。

6. 1. 子どもたちの探究を充実させる人との出会い・かかわり

子どもたちの探究を充実させる人との出会い・かかわりをとおして、「主体」の姿を引き出す。

本実践で出会った方からお話を聞いたり、提案を受けたりすることをおして、ゆうすけやりこの振り返りなどからも、本単元の学びを持続させる力を与えてくれたものになったと考えている。

また、子どもたちの主体性をさらに引き出すために設定した川島さんからのアドバイス。川島さんの言葉を受けて、子どもたちはある意味、「自由にやっていた。」と思わせてもらったと感じている。このアドバイスをもらった後、子どもたちはあらためて自分が気づいていたお城の魅力を見つめ直したり、新たな目線で見つけようとしたりすることにつながった。このような姿からも、目標をもって1学期から継続して学習に取り組む続ける主体の姿がみられたとともに、地域人材の方の言葉を受けて、自分のこれまでの取り組みや考えについて振り返る省察の姿も見られたと考え、このことは大きな成果となったとつながったとらえている。

6. 2. 学習対象とかかわる機会を複数回設定

学習対象とかかわる機会を複数回設定することにより、「主体」「活用」の姿を引き出す。

本単元では学習対象に設定した和歌山城を訪れかかわる機会を1学期から5回設定し、学習を展開してきた。しかし、ただ学習対象と数多くかかわれば、子どもたちの探究の姿が引き出せるものではない。どのような目的で和歌山城へ行きたいのか、どのようなことを調べたいのか、明確にもたせてかかわることにより、1回1回のかかわりが無意味なものにならず充実することにつながったと考えている。そして、それらのかかわりをとおして得た情報を活用する場面として、子どもたちが共有する場面が必要であることも明らかになった。和歌山城の自然について注目したみくやひろきの発言をきっかけに展開された話し合いの場面では、1学期に訪れて見たことや得た情報をも思い出しながら子どもたちのやりとりが展開された姿から、活用の姿もみられたとらえている。

6. 3. 発信方法別活動の設定と、協働の場面の設定

発信方法別活動の設定と、協働の場面の設定をとおして、「主体」「協働」「省察」の姿を引き出す。

発信方法別にグループを構成し、和歌山城の魅力を発信に向けた活動を進めてきた。5. 4. 3. のそうすけの振り返りをもとにして考えてみると、グループ江の活動を行った振り返りの際には、その時間にしたことや考えたことを整理し、次の時間への展望をもって活動を終えることができていたと考えている。毎時間、なんとなく活動するのではなく、自ら次の時間にすることを立てて、粘り強く活動することができていた姿からも、主体の姿を引き出すことができていたのではないかと考えている。

そして、振り返りを継続的に行ってきたことにより、「和歌山城の魅力をどのようにすれば多くの人に広めることができるか」という課題の解決に向けて、見通しを立てて活動したり、調べ方や発信の仕方を調整したりしながら多角的に物事を考えたりしてきた様子からも、省察の姿を引き出すことにつながったのではないかと考えている。

また、協働の場面の設定についても、6. 1. で述べた地域の外部人材の方とのかかわりや、6. 2. で少し述べたクラスの中で自分とは違う視点をもつ子どもと考えや情報を共有する機会をもつことにより、かかわり自らの学びに生かそうとしたり、自分の視点だけでなく多角的な視点から、課題について考えようとしたりし、協働の姿を引き出すことにつながったのではないかと考えている。

6. 4. 本単元の学習を終えて

本単元は子どもたちがあらためて和歌山城の魅力を見直し、もっと自分たち子ども目線で魅力を発信していくきっかけとなったと考えている。和歌山城の歴史、建物、自然、動物など、一人一人が自分の魅力にこだわりをもっていることを、チラシやポスター、動画、イベントなどをとおして多くの人に発信し、その反応や自分たちの発信の成果はどうなのか、和歌山城に多くの人が訪れるようになることにどれだけつながったのだろうかなど、検証していきたいと考えている。

1学期から和歌山城を学習対象に取り組みを進めてきたが、学習対象が別のものであったとしても、かかわる対象や人のことが好きになって興味関心を深めていくことがとても大切であるとあらためて感じている。学習対象やかかわる人に対してそのようになっていくことが、子どもたちの『探究』する姿を引き出す原動力にもなり得ると考えている。

7. 第5学年の成果と課題

子どもが学び続けようとする主体の姿を引き出すためには、子どもにとって学習材が身近なものであったり、学習をとおしてより身近なものになっていたりすることが必要であることが明らかになった。また、地域の外部人材の方との出会いやかかわりを意図的に設定して、子どものモチベーションを上げることも主体の姿を引き出すうえで効果的であることも明らかになった。そのために、外部人材の方と、出会いや効果的なかかわりの機会を綿密に打ち合わせるとともに、子どもたちにとってその機会を必要としている、また、その機会をきっかけに学習をより深めていこうとする状況かどうかを見極めながら設定していくことが課題であることも明らかになった。

学習材と繰り返しかかわる機会を設定することについても、子どもの主体、活用、協働の姿を引き出すために効果があったと考えているが、そのためには意図や目的を明確にした学習材とのかかわりや、かかわりをとおして得た知識や情報を子どもたちが共有する場面を効果的に設定することが必要であることも明らかになった。

8. 研究のまとめと今後の展望

今回、発達の段階を視野に入れて『探究』の姿を設定し、そのしかけを考えてうった。

両方の実践をとおして、2つのことが子どもたちの『探究』の姿を引き出すために重要であることが明らかになった。

1つ目は、子どもが学び続けようとする主体の姿を引き出すために、身近な学習材を設定することである。身近な学習材といっても、ただ物理的距離が近いだけでなく、子どもが「子どもが問題だと切実に感じる状況」や「行動せざるを得ない状況」が起り得る、または、起りやすいもの、また、学習をとおして学習材に対する興味関心を深めたり好きになったりするものである必要がある。学習材と繰り返しかかわる機会を設定することについても、子どもの主体、活用、協働の姿を引き出すために効果があったと考えているが、そのためには意図や目的を明確にした学習材とのかかわりや、かかわりをとおして得た知識や情報を子どもたちが共有する場面を効果的に設定することが必要である。

2つ目に、地域の人材を効果的に活用するである。地域の人材の活用により、子どもたちの主体的な学びを持続させるとともに、協働、活用、省察の姿を引き出すためにも有効であることも明らかになった。そのためには、子どもの発達の段階、興味関心等、子どもの実態を視野に入れ、地域人材との綿密な打ち合わせのもと、子どもが必要とを感じる場面において意図的、計画的、そして、継続的に地域の人材を活用していかなければならない。単元の中において点でかかわっていただくのではなく、子どもの必要感のある場面で繰り返しかかわっていただけるような「学びの伴走者」と

しての活用を追究していきたい。

今後も、これらのしかけをうちながら、総合的な学習の時間において子どもの『探究』の姿を引き出す実践に取り組んでいきたい。

参考文献

- 文部科学省(2021)「今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開」株式会社アイフィス
奈須正裕(2021)「個別最適な学びと協働的な学び」東洋館出版社
田村学(2018)「深い学び」東洋館出版社
田村学(2017)「カリキュラム・マネジメント入門」東洋館出版社